

なんでやねん

発行責任者 巻 田

No. 4 2

持続可能な社会を実現するために

1 食料自給率の低い日本は生き残れるのか？

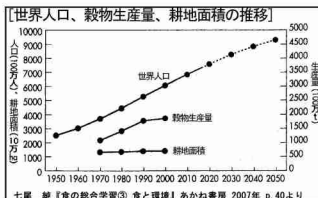
日本は海外で生産された食料を輸入して暮らしている。

食料自給率が低いのだ。カロリーベースで見た場合、40%を下回っている。先進国で最低ランクの食料自給率である。将来、食料が輸入できなくなると、確実に多くの国民が餓死する。今後、日本はどうすれば食料を確保できるのだろうか？



2 食料は足りるのか？

1950年に25億人だった世界の人口は、現在(2016年)70億人で、2050年には93億人以上になると予想されている。人口が増えれば、もっと食料や飼料が必要となる。世界の農業生産と食料消費が



食料の増産には2つ方法が考えられる。田や畑などの耕地を増やすことと、同じ面積の耕地からとれる農作物の収穫量を上げることである。

しかし、今後、世界の耕地面積はあまり増えないと考えられている。それどころか、放牧のしすぎや森林伐採などにより、毎年、日本の全耕地面積と同じくらいの広さの500万ha(ヘクタール)が砂漠化している。

また、収穫量をあげることもむずかしいと考えられている。遺伝子組み換えによる新しい品種の発明なども期待されているが、種子だけで生産できるわけではなく、安全な肥料や、健康な土や豊富な水も必要になる。

2014年現在では、途上国を中心に約8億人の人びとが飢餓に苦しんでいる。

では、日本は？ 私たちはどうするべきなのだろうか？ グローバルに考えよう。地球規模で飢餓をなくすために、私たちはどうするべきなのだろうか？

しかし、本当に世界の食料は足りないのか？ これには根本的な疑問もある。

3 地球環境問題と持続可能な社会

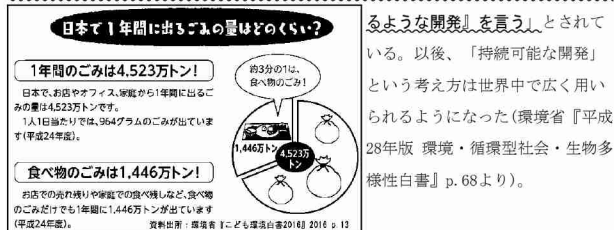
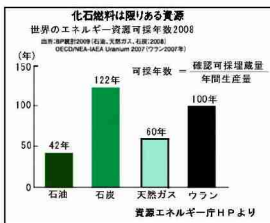
地下に眠る資源は、人類の暮らしに多くの貢献をしてきた。特に、18世紀にイギリスから始まった産業革命以降は、欧米や日本も多くの地下資源を消費して発展し、先進国の豊かさを保っている。その間、物質的に豊かになったが、公害問題も同時に経験してきた。

そして今、無限にあると思われてきた地下資源に「底」が見えてきた。地球規模で残りが少なくなってきたのである。このまま現代の人類が地下資源を使い続けると、21世紀の間にも地球上から地下資源はなくなってしまうかも知れない。たとえば、石油は化石燃料の一種であるが、2008年現在で可採年数は42年だとされている(その後、アメリカでシェールガスの採掘が可能になり、石油や天然ガスの可採年数は若干延長された)。

では、途上国が先進国並に発展するための資源はないのか？ 途上国の国々は先進国に資源を奪い取られたのに。資源の利用についての「南北問題」も深刻である。

ところで、人類だけで地球上に生存できているのではない。地球上では、多様な生物や大気、水、土壌などが有機的に結びついて物質循環を支えており、人類もまたその中でしか存在しえない。しかしながら、特に近年の人類の営みは、大気や水、土壌などを汚染し、生態系とその基盤である生物多様性に対して大きな打撃を与えた。地球の物質循環や生態系の破壊、ひいては人類社会の崩壊を回避するために、私たちは、地球という有限な器の中で「持続可能な社会」を築いていかねばならない。

「『持続可能』という理念は、1987年国連の環境と開発に関する世界委員会(WCED)の最終報告書『地球の未来を守るために(Our Common Future)』(いわゆる『ブルントラント報告』)において提唱された。『ブルントラント報告』では、『持続可能な開発』とは『将来の世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズをも満足させるような開発』を言う」とされて



るような開発』を言う」とされている。以後、「持続可能な開発」という考え方は世界中で広く用いられるようになった(環境省『平成28年版 環境・循環型社会・生物多様性白書』p. 68より)。